

巣立の季節

真光寺川を清流にする会 世話人 山口拓郎

あおぞらしく花は紫、新緑が目には鮮やかな季節の到来である。川面をわたる風が頬を払い、水が澄み川底が透けて見えている。日によっては透視度100cmのこともある。一時的な現象かもしれないが清流が復活したことは嬉しい。
今日はまた巣立の季節でもある。小学校の子ども達が中学校に進学して行った。真光寺川では魚や鳥や爬虫類が繁殖の季節を迎えている。

3月9日(日) 清掃作業日

快晴、水は冷たいが日射しは暖かい。
9時半に開戸親水に集合。鶴三小の横山先生、鶴四小の平野先生も参加される。
清掃作業ができなかったので流石にごみが多い。自転車も2台引き上げる。
鯉音橋の下で橋渡さんが運転免許証と診察券の入ったドル入れを拾う。交番に届ける。
翌日、若い女性が受取りに来る。
置き引きに遭ったものらしい。

3月23日(月)

鶴三小の卒業式にご招待を受ける。
2クラス61名の卒業生。
真光寺川で一緒に学習した子ども達。
一人一人校長先生から卒業証書を受け取る。
その前にマイク向かって簡潔に元氣よく進学後の抱負を思い思いに語る。
また6年間の思い出を全員で詩劇風に奇唱する。そして合唱。演出が見事だ。
この日のことは深く胸に刻まれたであろう。
花吹雪の中、在校生の作る人垣のトンネルを潜って巣立って行った。

3月26日(水)

山本さんが折衝して下さり有志で真光寺の電源開発の変電所を見学する。
境内に真光寺川の源流の一つがある。
所長と総務課長が変電所の機能役割を解説し広い構内を案内して下さい。
多摩丘陵の分水嶺に位置し水は真光寺川と片平川に分かれ流れとなる。
春霞の彼方「みなと未来21」が遠望された。海岸線から僅に20kmは隔たっているが塩害があるという。地下から清水を汲み上げスプリンクラーで罅子に注いでいる。それがやがて真光寺川へ流れ込む。



3月31日(月)

忠生七小新井先生からのお手紙を頂く。
「真光寺川のお話しをして頂いた子ども達も元氣に卒業して行きました。本校は統合のため閉校となります。七国山小となり現忠生六小へ移転します。私も他校へ転任いたします」

4月4日(金)

これまで第3火曜日に開催していた幹事会を第1金曜日に変更した。「一金会」と呼ぶことになった。失念していて電話で慌てて駅前のスエヒロへ駆けつける。
そろそろ「真光寺川まつり」に掛からなくてはという事など。

4月13日(日) 清掃作業日

都知事選、早めに投票をすませて開戸親水へ。快晴、清々しい眺望。鶴見川、真光寺

川面に透視度75cm。

4班に分かれて作業開始。小田急の鉄橋の下で2m近い青大将を発見。長い冬眠から覚めて大きな伸びをしていた。
ただ橋から能ヶ谷橋の間を受け持つ。橋の下手2m位の草むらから突然カルカモが飛び立つ。あとに卵が9個残されていた。心ならずも奪ってしまった。無事、雛が孵ることを祈るのみである。
鳥達は繁殖の季節を迎えている。

4月17日(木) 細菌検査の水採集

一時体調を損なわれていた松前さんが元氣になられ細菌検査を再開して頂けることになった。
下堰親水一開戸親水一元真光寺駐在所裏の3箇所から2時間開かかけて水サンプルを採集する。
うららかな春日和である。道々ごみを拾いながら歩く。
ただ橋の下手、目を凝らすと芦の葉の陰にカルガモの気鳥の頭がちらと見える。雛はあと幾日で孵るのだろうか。

5月1日(土)

鶴三小荒井校長訪問。
「真光寺川まつり」の計画をお話する。
ついでに「ごみフェスタ2003」のことも。丁度「団地まつり」と重なるとのこと

5月2日(土)

センターの「さしみ亭」で一金会。
その前に4時から能ヶ谷いこい会館で「野鳥」と「ゆりかもめ」のファイル作成作業。日本野鳥の会と東京野鳥の会の機関誌で毎月特集を組み野鳥の美しいカラー写真と解説が掲載されている。「真光寺川里親の会」の戸村公子さんのご好意で寄贈されたものだ。95年度から3年間のバックナンバー200冊余りが揃っていた。
幸い専用のファイルも入手できた。
小川さんに依頼して能ヶ谷いこい会館の蔵書に加えてもらうことになった。
一金会は「真光寺川まつり」の行事と段取りについて。

5月11日(日) 清掃作業日

9時半、開戸親水集合。
透視度を測っていた山岡さんが歌声を上げる。鶴見川30cm、真光寺川100cm

まさしく清流だ。原因を話し合う。一つの推測は先日まで水面を覆っていた青藻がこの時期黒ずんだ塊となって沈んでいる。これが何らかの形で浄化作用を果たしたのではなかろうか。いずれにしても自然の復元力には端尻すべからざるものがある。それにしても自然は「人間の横暴」をどこまで許容してくれるのであろうか。
和光小の大川先生も坊ちゃんも参加される。午後から4年生を源流探検に案内されるそうだ。
清掃作業をしていると散歩中の幾人かが声をかけて下さる。
「今年はカルカモの雛を見かけませんね」
皆カモのことに気がかけ雛の孵化を心待ちにしているのだ。
それにしても「ただ橋」下手の卵はどうなってしまったのだろうか？カラスが？青大将が？不吉な連想が頭をよぎる。一見平和な真光寺川もカルカモにとっては天敵に満ちた危険地帯あるうか。
季節は巡り、今日も川は穏やかに流れている。全てを包みこみそこで繰り返されていく厳しい自然の摂理については語るうはしない。



「さあ、清掃作業だ！」
開戸親水で朝のミーティング